

関西倫理学会 2022 年度大会シンポジウム趣旨

現象学と倫理学

加國尚志（立命館大学）

中村拓也（同志社大学）

現象学と倫理学という主題は、これまでたびたび取り上げられてきた。現象学の創始者であるフッサール自身が現象学者としてのその活動のほぼすべての時期にわたって他者論に取り組み続けていたことは、周知のことである。さらに、現象学における他者をめぐる問題構制は、その後サルトル、メルロ・ポンティ、レヴィナスといったいわば古典的現象学の中心問題にして根本問題であり続けてきたし、現代哲学のなかで「他者」というのが重要な論題の一つとなるに至った大きな要因であることに疑問の余地はない。翻って、現代現象学は古典的現象学で展開された感情移入についての研究を現代の共感論にかかわる様々な論題と接続するし（Zahavi, D., *Self and Other. Exploring Subjectivity, Empathy and Shame*, OUP, 2014）、また、初期現象学で展開された共同体理論の社会哲学的意義に対する注目も高まりを見せている（Luft, S. and Hagenhuber, R. (eds.) *Women Phenomenologists on Social Ontology. We-Experiences, Communal Life, and Joint Action*, Springer, 2018）。こうした意味で現象学は初期から一貫して連綿と倫理的な事象と現象学との関連は広範囲に及び深く絡まり合っている。

日本での近年の研究の動向に目を向ければ、応用現象学の大きな主題としてケアや看護といった主題に対する現象学的取り組みが積極的に展開されている。さらには、私たちが、様々な日常の経験のなかで出会うことになる倫理的な事象に取り組む現象学を最広義での現象学的倫理学と呼ぶならば、そうした現象学的倫理学の倫理学としての（不）可能性に対する原理的な批判的検討がすでにおこなわれている（「現象学的倫理学に何ができるか？——応用倫理学への挑戦——」『現象学年報』第 33 号、2017 年、〈特集現象学と倫理学〉『倫理学論究』vol4.No.2、2017 年）。それと並行して、フェミニスト現象学や批判的現象学のような、きわめて多様な事象に対して現象学を適用している近年の応用的な現象学の動向に回答しながら（Fielding, H. A. and Olkowski, D. E. (eds.), *Feminist Phenomenology Futures*, Indiana University Press, 2017, Weiss, K., Murphy, A. V. and Salamon (eds.), G., *50 Concepts for a Critical Phenomenology*, Northwestern University Press, 2019）、さらに進展させていくさらなる現象学的倫理学の導入と展開（稲原ほか編『フェミニスト現象学入門——経験から「普通」を問い直す——』ナカニシヤ出版、2020 年）、さらにはそれに対する批判も行われている（魚住洋一「フェミニスト現象学の『限界』——稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優編『フェミニスト現象学入門』を読む」『倫理学論究』vol. 7, no.1、2021 年）。

そこで本シンポジウムでは、こうした背景を踏まえて、現象学と倫理学について現象学の現代的展開のなかでの現象学の原理的・理論的な意味での現象学と倫理学の関係性、記述倫理学としての現象学の可能性、ケアや看護の現場での現象学的質的研究によるフィールドワークとそれがもつ倫理的意義が取り上げられることになる。

具体的には、まず、倫理学の根底にある「私」と「君」の基礎関係の解明に対する現象学の寄与を通して、現象学と倫理学の関係づけが試みられる。さらに、現代ドイツ現象学での現象学的倫理学の動向を示す現代の代表的現象学者の一人であるヴァルデンフェルスによる応答倫理学（responsive ethics）の内実と可能性が取り上げられる。現象学的倫理学的研究を遂行する際の示唆をメルロ・ポンティの倫理学か

ら引き出す試みが取り上げられ、それによって、記述倫理学としての現象学的倫理学の可能性が見定められることになる。加えて、記述的倫理学としての現象学は、単に経験の記述に終始するのではなく、場合によって規範倫理学に対して修正を迫るという仕方で倫理学と切り結ぶことが示される。さらに、看護やケアの現場でのフィールドワークのなかでの現象学的質的研究の意義と倫理的なリスクが、社会科学からの量的アプローチや質的実証研究を志向する GTA (Grounded Theory Approach) との対比で検討される。

第一の論点については、『フッサールの他者論から倫理学へ』(勁草書房、2021年)によって、綿密な実証的研究に基づきながら、フッサールの他者論と倫理学の研究に新地平を拓いた鈴木崇志氏(立命館大学)に、第二の論点については、『フェミニスト現象学入門』の編者の一人であり、日本でのこの分野の展開の第一人者であると同時に、『メルロ＝ポンティの倫理学——誕生・自由・責任——』(ナカニシヤ出版、2022年)によって、メルロ＝ポンティの現象学における倫理学を、彼の現象学にとっての付加的なエピソードとしてではなく、現象学的記述倫理学の歩みとして描き出した川崎唯史氏(熊本大学)に、第三の論点については、長年にわたって現象学を踏まえたフィールドワークを展開し、様々な場面での当事者の語りにも寄り添いつつ、現象学の現実の社会との接触面を拡大し続ける成果を陸続と公刊し続けている村上靖彦氏(大阪大学)にそれぞれご提題いただく。現象学的倫理学の取り組みの多様な展開のそれぞれ最前線に立つ以上の三人の提題者の発表を通して現象学的倫理学の多面的な展開の現時点での全容とその展開に一貫して底流として伏在し続けている現象学の哲学的・倫理学的性格特徴が浮かび上がることになるはずである。

特定質問者としては、『共依存の倫理——必要とされることを渴望する人びと——』(晃洋書房、2017年)の著者として知られ、さらに、編著『狂気な倫理——「愚か」で「不可解」で「無価値」とされる生の肯定——』において現実と倫理の切り結ぶ場面に着目し、同時にケアの倫理を主要な研究領域の一つとする小西真理子氏(大阪大学)に、現象学とは異なる臨床的な視角から浮かび上がる現象学的倫理学に対する疑問を投げかけていただく。また、フッサール自身の倫理学講義や『改造』論文の読解を通じたフッサール現象学における倫理学の展開についての実証的・体系的な研究から出発し、目下それに基づき現象学の教育学や教育の現場への展開可能性についての研究に取り組んでいる島田喜行氏(同志社大学)からは、実証的な現象学研究の立場からの現象学的倫理学への理論的・実践的展開可能性についての批判的検討をお願いしたい。